賀川豊彦研究会へ寄せて

米沢和一郎

かつて文部大臣が、学歴社会の現実を、西洋中世末期の教会の腐敗に例え、学歴過信に苦言を呈したことがある。中世の終わりは、教会が栄え、宗教が滅んだ時代であった。教会への寄進を募り、引き換えに免罪符を乱発し、教会は栄えたが腐敗がはびこった。教会が経済的に潤ったが社会的権威を失った結果、民衆の心が教会から離れ宗教が滅びた。そうした中世の教会腐敗が、宗教改革を招いた事例を引き合いに、教会を学校に例え、教育改革の本質を示唆した見事な比喩だった。教育改革で問題にされた諸々な事柄への炯眼を、歴史に学ぶという視点から、比喩を発したのは永井道雄であった。

その永井文部大臣が、賀川との会見記（注「思想の科学」昭和34年3月号p4-7）で"それだけ彼にはひかれるものがある。できるならば若い世代が受けつぎたい貴重な財産が彼の生涯にかくされている"との興味深い指摘は、賀川に学んだ多くの教育者の視点である。教育者永井道雄同様、キリスト教を絡めた歴史的炯眼を、賀川もことあるごとに発した。

〈水と油の賀川研究の現実〉

歴史とキリスト教の二面性が、賀川の言動を理解する解き口だとすれば、その良し悪しや、功罪は別にして、どちらが欠けても理解は難しいのではないか。だからといって、キリスト教、近代史の水と油の如き各論研究を否定するつもりはない。

だが"クリスチャンでないと理解できない"という台詞を吐く人ほど、筆者の経験則からすれば、賀川を伝えることに無責任だった。それは賀川自身の口癖で、その社会的働きすべてに集約される"日本教会の力の弱さ"克服を棚上げし、日本のキリスト教の置かれている諸々の現実を無視した逃げ口上のように聞こえた。

批判的研究への捨て台詞のように、賀川ミッションから投げ掛けられた逃げ口上を思い出す。それは、賀川の意図したキリスト教と、社会の二面性を、本質的に理解しているとは言い難いのではないか。

かつてウプサラ大学講堂で見た"自由に考えることはすばらしい。だが正しく自由に考えることはもっとすばらしい"（詩人トーリルド）の碑文は、結果的に正しさへの情報の蓄積をより充実させたが、正しくと刻まれた言葉の意味はそれだけ深く重かった。

以来賀川に対する、伝聞からくる百家争鳴や、ただ批判だけの批判、時代背景を無視した糾弾に不信感を募らせた。さらに明らかに信憑性が問われる論理を、多数の使用頻度で孫引きするに至っては、科学的評価は期待できないのではないか。そうした偏向ゆえの閉塞状況に対する憂慮から、資料のものがたる社会的・時代的背景や、歴史的事実を読み解く方法論を重視せざるを得なくなった。

それは、時代の価値観の変遷にともなう諸々の制約を踏まえ、賀川の生きた時代の価値観で語る、一つの正しさへの転換であった。「われこそが正しい」と踏み絵を踏ますような偏狭さを持つ特定の価値観への固執は、正しさを混乱させる事実を生んで来たのではないか。

そうした事実にもっと目を向け、日本のみならず、海外も包括した視点から理解することで、平和主義者の解き口が生まれる。そうした諸々の視点が持つ、正しさへの模索に、資料発掘を含め、どう対処したかが問われる。

〈賀川をテーマとすることの難しさ〉

キリスト教からの厳しい見方のみならず、近代史研究からも消えかかり、忘れ去られて行く存在になりかかっている現実。そうしたどちらからもよく言われて来なかった現実がものがたるように、賀川を主題とした先行研究は乏しい。その研究発表の場である後掲賀川研究機関とは別に、賀川研究会を企画し立ち上げた。それはキリスト教主体の賀川学会や、賀川記念講座が、賀川を主題とする研究の乏しさもあり、研究への深化がとぎれがちであった事実と無関係ではない。むしろそうした現実を強く意識した企画であった。

従来とは異なる歴史的視点から、行動の人であった賀川の論理に則して、アカデミズムの範疇を越えた学際的(教育・平和・生活学・文学等々)展開で、功罪を浮き彫りにした後に、キリスト教との連携を含め、水と油の現状を凌駕する新しい賀川研究を模索すべきだろう。

(よねざわ　わいちろう　　客員研究員)